

座長／早稲田大学スポーツ科学学術院／赤間高雄
／聖マリアンナ医科大学スポーツ医学／武者春樹

ドーピングはスポーツの持つ価値を損なう行為であり、実効性のあるアンチ・ドーピングはオリンピック・パラリンピック大会が成功するための必要条件である。2015年10月に発足したスポーツ庁の初代長官の鈴木大地氏は1988年ソウルオリンピックの金メダリストであるが、ソウルオリンピックの記憶として世の中の人々がまず思い出すことはベン・ジョンソンがドーピングにより失格した事件である。2020年東京オリンピック・パラリンピック大会を後世の人々に素晴らしい記憶を残す大会とするために、しっかりとアンチ・ドーピング活動が行われなければならない。本学会会員も2020年に向けてアンチ・ドーピング活動の一翼を担わなければならない。

本シンポジウムでは、アンチ・ドーピングの現状の問題点を整理して、2020年に向けての課題を考えることとした。まず、日本アンチ・ドーピング機構会長の鈴木秀典先生（日本医科大学）にオリンピック・パラリンピック大会におけるアンチ・ドーピング活動の重要性、および2015年1月に改定された世界アンチ・ドーピング規程のポイントを解説していただいた。サポートスタッフやスポーツドクターもアンチ・ドーピング規則を理解する必要があることを強調され、最新の検査・分析方法についても紹介していただいた。つぎに、座長の一人の赤間高雄（早稲田大学）が、日本国内のアンチ・ドーピング規則違反事例を分析し、違反事例をなくすために必要なことを提示した。アスリート、サポートスタッフおよびスポーツドクターへの情報提供がさらに必要であり、意図的なドーピングを根絶するためにアンチ・ドーピング教育の一層の充実が求められている。

3番目のシンポジストとして、渡部厚一先生（筑波大学）にOTC薬とサプリメントのアンチ・ドーピングにおける注意点をとりあげていただいた。OTC薬とサプリメントを原因とするアンチ・ドーピング規則違反、サプリメントの国内使用状況とその背景、含有成分の判断の困難さ等について具体的に解説していただいた。つぎに油井直子先生（聖マリアンナ医科大学）には、2015年の世界アンチ・ドーピング規程改定にともなって明確に導入されたインテリジェンスとドーピング捜査の内容について、日本スポーツ仲裁機構の研究レポートに基づき詳細に解説していただいた。最後に、オリンピックである室伏由佳先生（聖マリアンナ医科大学）に自らのアスリートとしての体験からアンチ・ドーピングにおける現状と問題点を提示していただいた。競技に参加した経験からみたドーピングの現状、ドーピングの前歴がある選手が競技復帰することに対してクリーンなアスリートとしての率直な感想、アスリートにとってサポートスタッフやスポーツドクターの役割の重要性などが説得力のある言葉で語られた。

最後に総合討論として、2020年に向けた課題について、それぞれのシンポジストの立場から発言していただいた。

本学術集会直後の2015年11月9日に世界アンチ・ドーピング機構独立委員会がロシアの組織ぐるみのドーピングを報告して、世界に衝撃をあたえた。この事件により、世の中におけるスポーツの評価は確実に低下した。本学会会員をはじめとしてスポーツに関係する者は、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会の成功に向けて、真摯にアンチ・ドーピング活動に取り組んでいくことが必要である。